

「試験」の過去と未来

伊藤 壮志



平成四年の開学当初から東北芸術工科大学の事務局職員として見てきた「大学」と、学部学生として過ごした米国の大学での経験を比べてみると、明らかに異なっている点は案外少ないように思う。

もちろん、日本における入学試験に対するこだわりは、アメリカ人から見れば分かりにくいところが多いのも事実である。もっとも、「試験」の役割について、日本人もアメリカ人も同じように理解していると思うが、しかし、その信憑性となってくると、どうも、アメリカ人は日本人ほど試験の結果をうのみにしない傾向があると思う。

その背景には、古代中国で生まれた科挙制度から始まり何千年もの歴史を持つ東洋の「試験」と、中世のカトリック教会の影響を受けながら西洋の大学が生み出した「試験」との本質的な違いがある。

東洋の場合、元々は行政を司るにふさわしい人材を確保するとともに、あらゆる国民に対して（努力さえすれば）「上」への道を提供するいわゆる「機会均等」の試験だった。一方、西洋における試験は教会の認可を受けた大学が、学生に課すことでその大学（あるいは

他の大学）に教師として在籍するのに相応しいかどうかを選考する手段であった。

西洋の場合も東洋の場合も、「試験」は大学や政府という権威ある機関が実施し、またその権威は、一般大衆にとっては理解しやすい「宗教・統治者」に因るものであった。現に試験の内容そのものを見てみると、実学的なものばかりでなく、経典や神学、倫理学など大きな比重を占めていた。

しかし、一つの大きな違いがある。歴史的に見ると西洋の試験が教育の場において古くから活用古されてきたのに対して、政府役員（官吏）の選抜に頻繁に用いられるようになったのは比較的新しいということである。

それでは、昔の西洋人が一体どうやって政府役員を選んだかという点、実は選ぶことなどあまりなかった。ヨーロッパの階級社会では、戦争や反乱が起きない限り、大抵の場合には貴族がその権利を独占していた。よって、貴族の息子として生まれてこなかった人が「偉く」なるのには大変な努力と運を必要としていたわけである。

もちろん、中世や江戸時代の日本をはじめ東洋諸国でも、似たような状況も何回も起き

ていることも事実。しかし、少なくとも戦後の日本のケースはそうであるが、「試験」＝「機会均等」という概念は依然としてしっかりと根付いており、また東洋の思想を引き継いでいる東アジア版「民主主義」のなかになお生きている。

しかし、受験人口の減少や、初等中等教育のカリキュラムの軽減、大学教育の大衆化、さらに社会人学生の増加などがもたらしている学生の学習能力と学習経験の多様化を前に、従来の選抜試験だけでは対応しきれないことが明らかになってきている。

今年から、東北芸術工科大学も一部の大学が既に導入している「AO型」入試を初めて実施する。「AO」＝アドミッション・オフィス」とは、受験生と大学双方が時間をかけてお互いを理解した上、入学する／させるかどっかを決める入学審査形態であり、また日本にとっては新しい試みでもある。

大衆化を日本より二十年も早く経験してきた米国の大学では既に広く使われているAO型入試は、日本の大学でも一層広まっていくことは間違いないと思う。また、日本の思想や文化の影響を受けながら、近い将来に「日本版AO」も、大学のみならず社会のあらゆる場面でごく普通の「選択手段」として確立するであろう。

（東北芸術工科大学事務局職員・山形市）